

平成15年度 日本農林漁業振興会会長賞

とよなが
豊永開発振興会

(岡山県新見市豊永佐伏)



ぶどう（ピオーネ）団地



ふれあい盆踊り大会の風景

特 色

1. むらづくりの背景・動機

新見市豊永地域は、市の南部に位置し、地形はほぼ菱形で東西 6.7 km、南北 9.8 km、周囲 34.9km、面積は 29.746km²で、標高 350m ~ 500m の地帯に、17 の集落と肥沃で広大な畑地が広がり、農業振興地帯を形成している。県庁所在地の岡山市までは、市街地から自動車利用で約 1 時間半の位置にあり、産業別就業人口で見ると第 3 次産業従事者が多く約 50%、第 2 次産業が約 35%第 1 次産業が約 15%となっている。

豊永地区の広域にわたる村づくり組織活動の歴史は古く、昭和 57 年に豊永開発振興会

が発足し、当初から、地域の中心産業である農業関係組織の連携を中心としながら、女性組織、高齢者組織、消防団、青年団等の各種組織を構成員として、文字どおり地域全体の振興を図るものとして活動してきた。

これは、地域の産業や、生活環境その他の課題解決を進め、特産品開発、農産加工品開発などを行い、地域全体がともに発展していこうという、発足当初からのリーダーをはじめとする地域住民の問題意識の現れともいえる。

2. むらづくりの内容

早くから広域での活動を起こし、常に話し合いによる課題解決を心がけてきたことから、地域での合意形成の成果が、59年の“農村情報連絡施設”竣工、61年の“豊永山村広場”竣工、63年の“豊永ふれあいの家”完成等と続いていった。

特に、平成3年からは中山間地域農村活性化総合整備事業に取り組み、畑地の基盤整備とぶどう、トマトの生産拡大、集出荷施設及び農業生産振興拠点施設（農業構造改善センター、ふれあいセンター満奇）の整備等が図られた。

近年、就農者の高齢化・担い手の不足等に伴い、地域の活力が失われつつあることから、地域住民から危機感を訴える声が高まり、「豊永開発振興会」役員会において、組織の再編強化と事業内容を協議した結果、平成11年度には構成組織員の拡大と地域有識者を加えるなど、組織の再編成と事業内容の充実を図った。これにより、さらに地域の各種組織が名を連ねることとなり、同時に各部会に学識経験者として、地域有識者が加わり、会の運営と、企画推進を強力に進めることとなった。

集落単位のものになりがちな地域活動を、20年の長期にわたり、300戸を上回る広い範囲で展開し、専門部を設け、話し合いによって地域振興を進めてきていることの地域発展への貢献は特に大きい。

○農業生産面

葉たばこの産地として、全国に名声を博していた時代もあるが、昭和61年に豊永地域に最初にピオーネが導入され、現在では、葉たばこに替わり、ぶどう（ピオーネ）が中心作目となっている。阿新地域の中でも特に品質の優れたピオーネは、販売額も年々増加し、平成14年度には、3億円に達し、県下有数の産地となっている。また、雨よけ夏秋トマト、肉牛、もも等が生産の多い作目である。市内では農業生産の盛んな地域であることから、専業農家率も23%と高くなっているが、担い手確保対策、高齢化対策、廃園化防止対策が必要になってきている。

○生活・環境面

平成4年には、地域拠点施設として豊永構造改善センターが完成、各種交流・スポーツ行事や調理実習などに活発に活用されている。また、地区内の観光資源である満奇洞（鍾乳洞）周辺整備でふれあいセンター満奇（豊永地域活性化施設）が平成6年に完成、地域資源の紹介、特産品の加工・販売、特産品祭り等を行い、地域内外の交流に役立っている。

地域外との交流を進める一方で、観光に訪れる人々による、空き缶・ゴミの投げ捨てが目立つことから婦人部による空き缶拾い、生徒による空き缶拾いなどを実施している。また、地域・家庭の環境整備運動として、沿道・観光施設への花の植栽、花苗の配布なども

実施されている。高齢者を対象の活動として、安心して暮らせる地域づくりを進めようと平成 13 年度から「豊永ふれあいサロン」と称して、ボランティアの方々の協力により年 10 回健康講話・健康体操などの講座を実施し好評を得ている。また、生涯学習運動の展開として、絵画教室をはじめ 14 の教室を開いており、約 300 人の地区民が参加している。